

## 回教圏研究所をめぐる

—その人と時代—

田村 愛理

### 一 地域研究者と時代

第二次大戦後の日本の地域研究が、反発にしろ追従にしろ、圧倒的にアメリカ合州国の地域研究の影響の下に成長してきた事は否めない。そして、アメリカ合州国の地域研究はその戦後のグローバルな政治戦略と密接に関わってきたことも確かである。

興隆を極めたアメリカの地域研究に決定的なインパクトを与えたのはベトナム戦争の敗北であった。ケネディ政権を担ったアメリカ東部の伝統的エリート達、即ち「ベスト&ブライテスト」のもたらしたベトナムの現実の誤認、その結果としての戦争の泥沼化、そして敗北によりアメリカ社会が受けた深刻な影響は、以後の東南アジア地域研究にも確実な衰退をもたらしている。

一九八一年〜八二年にかけてアメリカ合州国で中東研究を行う機会を得た筆者にも、アメリカの受けたこの精神的トラウマのエコーは様々な局面で感じさせられた。例えば中東研究においてそれはイラン革命とイスラエル問題に一番大きな反響を起こす。何故アメリ

カの善意が、デモクラシーが作用しないのか、授業でゼミで学生達は真剣に討議しあっていた。一人の学生が殆ど叫ぶように言った言葉が忘れられない。「イスラエルでアラブ人が差別されているなんて私には信じられない。あの国には(アラブ諸国と違って)アメリカと同じくデモクラシーがあるはずだ」。アメリカの大学院の授業は大変厳しい。次から次へと本を読ませレポートを書かせ、方法論を徹底的に叩き込む。しかし、その厳しい訓練の結果として育ったベスト&ブライテストの異文化認識が対象の現実と全く掛け離れたものだとしたら余りにも無惨すぎはしないか。未来のアメリカのベスト&ブライテスト達の「中東にもデモクラシーは可能なのか」という議論を聞いていて、私は大東亜共栄圏を言いたてた人々の中にもこの人達とおなじように真摯にアジアの解放を信じていた人々もいたのであつたらうとふと合点がいったのである。人は時の中に生き、その時の流れからは決して自由ではない。それでは自分を取り巻く時代環境、自分の生の条件とは何なのか。

地域研究をすすめる際、対象地域に対する事実認識は不可欠であ

る。そして、そこで得た個別的な認識を有機的な知識とするためには、方法論が勿論不可欠となる。しかしさらにその上に、我々はある方法論を持って対象を観察している我々自身を制約している条件を自覚的に明確にする努力が必要なのではなからうか。フィールドワークをする、あるいは資料を読み事実認識を重ねることは忍耐力さえあれば比較的容易にできる仕事である。それをある学問的方法論により、分析することは方法論を叩きこまれていけば、さらに容易なことかもしれない。最も難しいのは観察し記録し分析する自身自身の立場を自覚することである。しかし正直なところ一研究者として、自身の生きている現代日本の条件を明確にし、さらにそれから影響をうけている自分の観察視点を測定する方法は未だ開発されていないし、私にはそれを提示できる力もない。

そこで、研究者と対象を取り巻く時代環境とその影響という、真に考察に値するこの問題を私はある過去の事例に投影してみたい。つまり大東亜戦争という名のもとに行われた日本の帝国主義的膨脹の時代にこの戦争と共に発展したイスラム地域研究をめぐる諸問題——それがどのような政治環境の中で、どのような人々に担われ、どのようなテーマをめぐるって、どのように跡絶えていったのか——を一事例として提示してみたい。日本の戦前のイスラム研究の成果、方法論は、一部の例外を除いて殆ど戦後の世代に橋渡しされていない。これは勿論敗戦により戦前の地域研究の立脚点であった大東亜共栄圏という価値観が否定されたこと、またそれまでに収集した資料も戦災により消滅してしまったり、あるいは占領軍により国外に持ち出され、散逸してしまつたことなどが理由として考えられる。

しかし、幸いにも戦前のイスラム研究の様相を示す雑誌『回教圏』が関係者の努力により一九八六年復刻された<sup>1)</sup>。本論文は『回教圏』を中心にこの雑誌の発行元である回教圏研究所をめぐる人々とその時代について述べるものである。敗戦とともに消滅してしまつたこの研究所の歴史が、地域研究と時代性と人との関係についての貴重な示唆を我々に与えてくれるかもしれないと考えるからである。

## 二 回教圏研究所のできるまで

日本において明治以降断片的にしか行われていなかったイスラム関係の論考が続出し、この地域にたいする研究が注目を浴び始めるのは一九三〇年代に入つてからのことである。ことに、一九三八(昭和十三年)は日本のイスラム地域研究にとってエポック・メイキングな年である。この年に組織化されたイスラム関係の研究機関は、三月設立の回教圏研究所を始めとして、九月に設立された大日本回教協会、東亜研究所の回教班がある。又外務省調査部回教班は季刊誌『回教事情』をこの年の五月に発刊し始めている。この他回教圏研究機関としては大川周明の主筆する満鉄東亜経済調査局の回教グループが翌一九三九(昭和十四)年秋より、『新亜細亜』を刊行し、ここには前嶋信次が在籍していた。またこの頃つくられた太平洋協会は平野義太郎や岩波新書(赤版)の『回教』を著した外交官の笠間吳雄がいた。これらの研究所の設立の目的は、例えば大日本回教協会は研究部も持ち、雑誌『回教世界』を刊行し、そこには古在由重、村上正二が在籍していたが、陸軍大將林銑十郎を会長としていたことから窺えるように大陸工作者養成機関としての側面が強かった。

これらの諸機関の内で終戦に至るまでの時期、回教圈に関する単なる国策に沿った時事情報収集機関としてでなく、明確に学術的研究機関としての回教研究を意図していたのは回教圈研究所であろう。

一九三〇年代は、三十一年の滿州事変の勃発、翌三二年の上海事変、滿洲国の成立、五・一五事件、三六年の二・二六事件、三七年の蘆溝橋事件、日華事変とまさしく日本の帝国主義的膨脹に伴い、軍部専制が進んでいった時代であった。中国大陸の西北へと侵略を進める日本陸軍にとって、この地域とそこに在住するイスラム教徒に関する情報収集、調査、研究が急務となる。なかでもイスラム研究は東洋史、西洋史、日本史に分別されている明治以降の歴史学研究の間隙にあり、従来その重要性は指摘されながらも研究の遅れている分野であった。明治以降のアカデミズム体制の閉鎖性そのものの中に、この時期にイスラム研究が陸軍の対外関心と結びつき発展する素地があったといえよう。その意味で、この時期のイスラム研究への急激な関心の高まりは陸軍の対外関心の高まりと連動していた。これらいわば国策の要請に基づいて設立されたイスラム研究諸機関の中において、回教圈研究所はどのような特色を持っていたのだろうか。

回教圈研究所の研究方針には設立から活動停止まで所長であった大久保幸次の個性が強く反映している。所長を勤めた大久保幸次は一八八七明治二〇年東京牛込に生まれた。徳川家直参の旗本の子孫で、大久保彦左衛門の家系とも言われている。<sup>(2)</sup>一九一三(大正二)年東京外国語学校ドイツ語本科を卒業した後、一九一八年東京帝国大学東洋史科選科を卒業した。帝大在学中からトルコに対する関心

が高まったらしい。トルコ語、トルコの歴史は独習しようである。一九三三(昭和八)年、小林元、松田寿男らとともに「イスラム学会」を設立し、一九三六年年に日土協会、国際文化振興会から五百円づつの奨励金を得、日土協会と外務省の文化使節として三月にトルコに派遣された。イスタンブールに着くや駐トルコ特命全權大使徳川家正公爵の招待を断って、憧れのイスタンブール見物に飛び出したという逸話は大久保幸次の性格の一端をあらわしている。しかし、大久保のこの行為を非礼としてよりは「愛すべき……」研究への情熱とみた徳川家正の資金援助により、大久保は一九三八(昭和一三年)三月、白金三光町に家屋を購入し「回教圈攷究所」(昭和一五年に「回教圈研究所」と改称)を発足させることが出来たのである。徳川家正の援助は一万円とも五万円とも諸説あって確定しがたいが、たとえ一万円としても当時としては大金であったことは確かである。しかし、研究所として活動してゆくには充分とはいえず、同年五月回教圈攷究所は財団法人善隣協会の経営傘下に入るようになった。

善隣協会は一九三四年に設立された、駐蒙軍の指示を受けて対蒙古工作を目的とする文化事業、人材養成を図る機関であり、陸軍大將林銑十郎等の援助により設立された機関である。元々対回民対策の重要性を意識していた関東軍は、善隣協会内に回教圈研究所を作ろうと当時回教問題の権威者であった松田寿男、小林元を介して、大久保幸次を説き、一足先に発足していた回教圈攷究所を同協会経営下に置いたのである。大久保がこれに賛同したのには経営資金上の問題の他、各方面からの圧力もあったと思われる。この時の事情

に關しては「回教圏」の第一巻第一号に「たまたま回教問題にたいして深甚な関心をよせていた財団法人善隣協会はアジアにたいする国策的見地から本研究所との提携を熱望してきたのである。かくて、大久保所長は、国策にたいする大乘的立場において、同協会の井上理事長及び大島常任理事と数回にわたり懇談の結果、純学術調査機関としての本研究所の面目を維持することを条件として一切の経営を同協会に移管することに両者の意見は一致した次第である。」と研究所側の条件を述べてある。ついで一九四〇（昭和一五）年四月、内部機構の改革を図るとともに「回教圏研究所」と改称し、場所も原宿に移転し、一九四五年五月に空襲により全焼するまで活動を続けた。

### 三 回教圏研究者の人々

回教圏研究所の組織構成、人員構成は漸次成立していったものであり、又戦争中のことであり応召が続き初期の役職・人員は年毎に変化していつているのであるが、一九三八〜三九（昭和一三〜一四）年の白金の研究所時代と一九四〇年の原宿移転後の研究所時代に分けられる。

研究所設立時の事務職員を除いたメンバーは、

所長兼文化事業部長 大久保幸次（駒沢大学教授）

研究調査部長 小林元（駒沢大学教授）

資料部長 松田寿男（国学院大学教授）

研究員(2)

野原四郎、宮城良造、

嘱託(1)

蒲生礼一（東京外国語学校教授）



東京・白金の回教圏研究所屋上で(後列左から)初めて背広を着た日の金沢誠、福島一郎、岩永博、1人おいて小出松雄、服部信彦、2人おいて川崎寅雄、幾志直方、小出正、(前列右から)佐木秋夫、蒲生礼一、大久保幸次、徳川家正、小林元、野原四郎  
(写真提供金沢誠氏)

攷究生(2)

であった。

翌一九三九年四月にはメンバーは

所長

大久保幸次

研究調査部長

小林元

攷究員(2)

野原四郎(駒沢大学講師)、蒲生礼一

(東京外国語学校教授)

助手(6)

幾志直方(東大卒)、小出正(外語卒)、

岩永博(東大卒)、服部信彦(東大卒)、

金沢誠(東大卒)、小出松雄(外語専卒)

囑託(4)

佐木秋夫(東大卒)、川崎寅雄(名高商

卒)、荒川忠明(外語学生)、宮坂好安

(早大卒)

書記

福島一郎

として紹介されているが、一九四〇年四月の研究所改称以降、

内部機構が改革され、同年十月の研究所概要では、

所長

大久保幸次

研究部

野原四郎、蒲生礼一、宮坂好安、幾志

直方、佐木秋夫、鈴木朝英、村野孝、

勝静夫、竹内好、鏡島寛之、井筒俊彦、

幼方直吉、田辺穂積、御園桂一郎、

石井茂晴、

編集部

と紹介されている。

その後所員としては一九四一年以降、遠峰四郎(一九四五年五月

応召)、一九四二年秋に沢田昌夫(一九四三年応召)、宮崎竜夫、吉村一雄等が入所している。

これらの人々の内、設立時の主要メンバーであった、小林元、松田寿男は後期には抜けていることに気づくが、これは大久保所長と小林元、松田寿男との意見が生じたためであるらしい。野原四郎の談によれば、『回教圏』の編集方針については、善隣協会から度々文句を食いました。ようするにもっと時局にあわせるということでした。所長の久保さんは、経営者風をふかす善隣当局をあいにくにいろいろ苦心していたことと思われまふ。よく所長は私どもにこう言っていました。『あの連中はなんにもわかっちゃいない。自分たちの信じる通りにやるだけさ。』しかし、ほんとうのところ、大久保さんには、いわゆる回教政策なんか余り興味がなかったようです。(略)すなわちもっと時局に応じた回教研究を指向する者と「そういうことをゴタゴタいう連中にはそれなりに応対しながら、自分は自分で好きな学問や研究をやっていればよい。」とする大久保所長との間に編集方針をめぐって意見の不一致があったようである。現に一九四〇年一月に『回教圏』の編集兼発行人は小林元から福島一郎に変わっている。この時、岩永博は小林元とともに去り、またパレスチナ問題を紹介した宮城良造は惜しくも攷究所設立後間もなくの同年十月病死している。金沢誠、服部信彦、小出正らは一九四〇年までには研究所を転職あるいは兵役により転出していった。野原四郎は後期のメンバーについて、「所名変更後の後期のメンバーの顔ぶれから考えてみますと回教圏研究所にはずいぶん変わった仲間があたかも申し合わせてたむろしていたようにみえます。し

かし、それもいつのまにか類は友をよぶという結果になっただけのことです。」と述べているが、後期には時局の進展とともに戦争が一層メンバーに大きな影響を及ぼすことになる。『回教圏』の編集をしていた福島一郎・大久保所長の弟子でコーラン研究をしていた鏡島寛之、マレー研究の田辺穂積、東大人類学の学生であった宮崎竜夫は戦死している。日勝静夫は病死、鈴木朝英はマレー司政官として、また村野孝・竹内好・石井茂晴、吉村一雄等が次々と出征していった。<sup>(13)</sup>

生き残った人々の中で、初期に去っていった小林元・松田寿男・岩永博を除く関係者の内、戦後のイスラム研究にその名を留めているのは、東京外国語大学ベルシャ語科教授となった蒲生礼一、アラビア協会の川崎寅雄、イスラム哲学研究で高名な井筒俊彦のみである。野原四郎・竹内好は中国近代史、金沢誠はフランス近代史、鈴木朝英は教育史、幼方直吉、御園桂一郎は東洋史の研究者として戦後活動することになる。戦前の回教研究と言うものが戦後語られなくなったのはこのあたりに事情がある。当時は世界恐慌の影響で文科系出身の研究志望者の就職口は極端に少なかった。研究職に就く機会を決して多くはなく、自分の専門は別であるが口すぎの為、回教研究をすることになった者も多い。<sup>(14)</sup> この中でも就職時の動機はそうであったかもしれないが、終始一貫研究所の活動に積極的に関わったにもかかわらず、戦後イスラム研究を断念することとなる野原四郎の姿勢については後に考察してみる。戦後のイスラム地域研究が少なくとも自覚的には戦前の回教研究と切り離されていると感ずる断絶の原因の幾つかが彼の研究歴の変化に見られるからである。

それはさておき、研究所の雰囲気はそこに関係した多くの人々から、「非常にリベラルであった。」(金沢談)<sup>(15)</sup>、「あの時代、戦争と軍事専制のなかで回教圏研究所は大久保所長という人の個性で奇蹟的に自由な雰囲気は保たれていた所でした。」(石井茂晴談)<sup>(16)</sup>、と回想されている。

小林元・松田寿男らと離れ、経営者の善隣協会と機関誌の編集方針についてもめながらも、その設立から活動停止に至る迄、「リベラル」と所員達に思わせる研究所の体制を築いたのは大久保の功績であることは確かであろう。既に他界した関係者の回想によっても、また存命の関係者とのインタビューによっても、写真に残されたその頑迷そうなカイゼル髭の印象とは裏腹に、大久保の柔軟な思考と優しい人柄の思い出はどれも一致している。大久保が一九四七(昭和二年)に癌で亡くなってからも、最近迄「回教圏研究所ゆかりの会」が続けられていたことにも大久保がいかに所員の信頼を得ていたかが窺える。

所員からの支持を受け、大久保が固執した純學術機関としての回教圏研究所の設立目的は「回教圏研究所概要」に以下の如く記されている。「本所の研究対象は回教であり、これを回教圏における民族・文化等の諸面より討究し、もって国策の要求にこたえ、また我が国人のこの方面に関する知識を啓蒙し、さらに回教圏諸国との文化提携に努めんとするものである。」回教圏とは満蒙・支那・蘭印その他の南洋・インド・アフガニスタン・イラン・ソ連・バルカン・トルコ・アラビア系諸国・エジプト・アフリカを包括するものとされ、この目的を達成するための事業としては、(イ)回教圏に関

する学術的研究調査及びその発表、(ロ)回教圈に関する資料の蒐集・整理・保存、(ハ)月刊『回教圈』その他回教圈に関する図書出版、(ニ)回教圈に関する啓蒙を目的とする講演会・講習会・展覽会の開催、(ホ)この本他所の目的を達成するに必要な事業、が行われた。<sup>(17)</sup>この目的にそった大久保所長の研究方針は野原四郎の回想によれば、「所長は、ヨーロッパ人のイスラム研究は偏見にみちいて、例えば『片手にコーラン、片手に剣』というような言葉を捏造してイスラム教を殺伐で野蛮なものと思込ませようとしている、と言つて憤慨しておりました。所長の努力の方向は、ヨーロッパ人を経由しないで直接イスラムの研究を進めていきたいというものであります。(略)」とあるように、直接原典から研究するべく、トルコ語・ペルシャ語・アラビア語の講習会が開かれ、「トルコ語読本」・「ペルシャ語文法」も機関誌に連載された。そして欧米経由でない日本人独自のイスラム学の設立を目指した研究の成果は機関誌月刊『回教圈』として、一九三八(昭和一三)年七月から一九四四(昭和一九)年十二月まで全八巻七十号全六九冊(各千部)が出版されたのである。

それでは時局の中に短命に終わった回教圈研究所は、時代と研究という我々の考察課題に対して、何を手掛りとして遺しているのか、『回教圈』の論考をテキストとして以下に検討してみよう。

#### 四 『回教圈』の論文

『回教圈』は日本で最初の回教圈を対象とする学術誌であり、当時の時流に乗ってその後次々に発行された回教圈専門誌の中で最後

まで続いたものである。研究所創立時には『回教圈』とは別に研究紀要を発行するつもりであったらしいが、これは実現されないで終わった。研究所の人員だけでは月刊誌を発行するだけで手一杯であったと思われる。従つて『回教圈』は回教圈に対する学術研究の成果を発表するのみならず、同時に回教圈知識を国内に普及する啓蒙的役割の担当も目的としていた。

『回教圈』全八巻——一巻六号六冊(一九三八年七月—二月)、二巻六号五冊(一九三九年一月—六月)、三巻六号五冊(一九三九年七月—二月)、四巻二号一冊(一九四〇年一月—二月)、五巻二号一冊(一九四一年一月—二月)、六巻一〇号一冊(一九四二年一月—二月)、七巻一—一冊(一九四三年一月—二月)、八巻九号九冊(一九四四年一月—二月)——のオリジナル版は、一九三八—一九四四(昭和一九—一九四二)年迄の世相を反映している。一九四二(昭和一七)年頃から用紙の入手が次第に困難になり、発刊が遅れたり、合併号とせざるを得なくなる事情が頻繁に編集後記に述べられている。末期に近づくに従つて、用紙不足の上に応召による人材不足が重なり、掲載文も漸次少なくなり、冊子が薄く、また次第に紙質も悪くなつていく。各巻の編集はおおよそ以下の項目に分けられる。設題、論考、説苑・資料、翻訳、紀行、書評、回教圈情報・日誌、語学講座、伝記、回教知識の葉、研究所彙報。項目は漸次変化しており後期に行くほどバラエティに乏しくなっており、特に八巻は幾つかの論考と翻訳のみとなっている。

これらの内、当時の人々が回教圈のどの地域に関心を抱いていたのかを知る為、論考、説苑・資料、翻訳、紀行、書評、の項目の

表I 『回教圏』の地域研究(各地域論考の地域関係総論考数に対する%)

	1938年	1939年			1940年	1941年	1942年	1943年	1944年		
	1巻	2巻	3巻	4巻	5巻	6巻	7巻	8巻	計	平均%	
総論考数	91	66	46	59	61	39	42	26	430		
回教一般の論考数	22	25	4	17	14	11	17	16	126		
地域関係の論考数	69	41	42	42	47	28	25	10	304		
年毎の%	100	100	100	100	100	100	100	100	100		
支那(満蒙を含む)	8	11	5	8	8	4	4	2	50	16.4	
年毎の%	11.5	26.8	11.9	19.0	17.0	14.2	16.0	20.0			
中央アジア	8	0	2	4	3	2	1	1	21	6.9	
年毎の%	11.5		4.7	9.5	6.3	7.1	4.0	10.0			
南洋	1	3	1	3	11	6	3	1	29	9.5	
年毎の%	1.4	7.3	2.3	7.1	23.4	21.4	12.0	10.0			
インド・パキスタン	4	3	3	5	3	2	2	2	24		
アフガニスタン	1	0	1	1	0	0	1	0	4	9.2	
年毎の%	7.2	7.3	9.5	14.2	6.3	7.1	12.0	20.0			
イラン	5	0	1	2	4	2	1	0	15		
アゼルバイジャン	1	0	0	3	1	0	0	3	8	7.5	
年毎の%	8.6		2.3	11.9	0.8	7.1	4.0	30.0			
中東	11	6	5	6	7	4	5	0	44	14.4	
年毎の%	15.9	14.6	11.9	14.2	14.8	14.2	20.0				
トルコ	28	7	19	3	5	3	3	1	69	22.6	
年毎の%	40.0	17.0	45.2	7.1	10.6	10.7	12.0	10.0			
バルカン	3	3	0	0	0	0	0	0	6		
ヨーロッパ・ソ連	1	3	2	6	1	4	2	0	19	8.2	
年毎の%	5.7	14.6	4.7	14.2	2.1	14.2	8.0				
アフリカ	1	4	6	1	2	1	2	0	17	5.5	
年毎の%	1.4	9.7	14.2	2.3	4.2	3.5	8.0				

中から比較的的地域名がはつきりしているものを選び出し、各地域の地域研究全体に対するパーセンテージを試算し、『回教圏』に現れた地域関心の傾向と変化を分析してみよう。(表I参照)

全八巻七十号を通してのこれらの項目の中の地域研究に占める割合が一番高いのは、トルコ通の大久保所長を頂き、また日土友好協会会長である徳川家正の資金援助を受け発足した研究所の事情を反映して当然トルコ関係で約二三%、次が支那の回教徒に関するもので約一七%、イラク・シリア・アラビア・エジプト・パレスチナ等今

日いわゆる中東と呼ばれる地域に関するものは約一四%、南洋と呼ばれていた今日の東南アジア島嶼部の回教徒に関するもの約一〇%、インド・パキスタン・アフガニスタン関係約九%、バルカンを含めたヨーロッパ・ソ連関係約八%、イラン・アゼルバイジャン・アルメニア関係約八%、中央アジア関係が約七%である。

次に、その内容を地域別に見てみる。トルコ関係はその大部分は一巻六号のアクチュルク追悼や三巻三・四号のトルコ特集号の時のトルコに関する文学・時事情報等の短い紹介が主であり、本格的な論考はない。注目すべきものとしては大久保所長のトルコ語による日本歴史の紹介がある。また、中東、インド、イラン地域に関してもアラビア語、ペルシャ語等の原典に依拠した本格的な論考はイスラム哲学の井筒俊彦、言語学の蒲生礼一の論考が数篇あるのみで、あとは事情紹介、書評の程度である。しかし、原典ということに固執しなければ、宮城良造の論考、イラン湾の重要性や当時まさに同時進行しつつあったパレスチナ問題の紹介は着眼点も分析も非常にすぐれており、欧米の資料に依拠したのであるが今日の状況からみても賞賛されるべき出来とおもわれる。また川崎寅男、中野英治郎の幾つかの中東地域の紀行文は興味深い。<sup>(20)</sup>ヨーロッパ関係のものではイギリス、フランス、イタリア、ドイツ諸国の回教徒政策に、反対に被植民地国としてのアフリカ諸国では植民地における回教法などの観点から植民地経営に注目した論考が多い。これらの地域研究の中で最も水準が高く、今日の研究状況と比較してみても注目されるのは、支那(滿蒙を含む)及び南洋の回教徒に関する研究である。この地域に関しては、中国語、マレー語等の原典からの研究の

みならず、現地調査に基づくかなりスペシフィックなテーマの質の高い研究が行われ、単なる異風土紹介以上の興味深い論考が発表され、他の地域に比べると現況分析も大変ビビッドである。即ち地域研究の質からみると圧倒的に支那、南洋の回教圏に研究が偏重していることが明白である。それでは次にこの両地域にたいする研究の内容に注目してみよう。

第一巻から八巻までの支那(滿蒙を含む)地域の書評、資料、論考は以下である。

第一巻―(論考)「高車独立年代攷」、「支那「回民」の由来」(松田寿男)、「雲南回教徒の反乱」、「新疆とロシアとの通商関係」(野原四郎)、「突騎施の戦歴」(前嶋信次)、「翻訳」「支那の女子回教徒」、「伝記」「快傑馬仲英の履歴」、「書評」「中国の西北角」、「蘭州之工商業興金融」、「Tso Tsung-tang」(野原四郎)、「紀行」「燕都に清真寺を訪ねて」(松田寿男)。

第二巻―(論考)「支那回教余談」(大久保幸次)、「仏教徒のみたる支那回教徒」(野村瑞峰)、「支那回民の声」(唐至中)、「回疆」(小林元)、「資料」「滿州回教協會の成立」、「中国回教總連合会近況」、「西北回教連合会声明」、「中国回教總連合会週年宣言」、「紀行」「日本語と回民児童」、「支那的回民言語叢聞」(小林元)、「書評」「中国回教史研究」(松田寿男)。

第三巻―(論考)「元代の回回人賽典赤胆思丁」(島崎昌)、「中部支那の回教について」(佐木秋夫)、「資料」「支那におけるキリスト教教會の対回教工作」、「書評」「Cultural Relation on the Kansu-Tibetan Border」(幾志直方)、「その他」「支那回民諸君に告ぐ」

(大久保幸次)

第四卷―「資料」「天方典礼扱要解」の邦訳に際して(野原四郎)、「支那本部各地の回民状況」、「中国三十年來の回教文化」(趙振武)、「回漢紛糾経歴録」(蘇盛華)、「書評」「會問吾々中国經營西域史」、「ラティモア」農業支那と遊牧民族、「比屋根安定」支那督教史(幾志直方)、「蒙古と青海」(宮坂好安)。

第五卷―「論考」「最近の支那民族問題」「甘肅青海省境における回教徒の生活」(西雅雄)、「顧頤剛と回教徒問題」(竹内好)、「大食と唐との交渉に関する一資料」(田坂興道)、「アラビア地理書の明代写本の存在について」(前嶋信次)、「清真大学考一、二」(角野達堂)、「西域古譚」(金指正三)、「翻訳」「中国回教徒の牙城」(Y・P・梅)。

第六卷―「論考」「大同清真寺の『敕建清真寺碑記』について」・「回回館訳語に関する覚書」(田坂興道)、「西北回教問題における馬鴻逵の地位」(三橋富治男)、「北支・蒙疆の回教」(竹内好)、「チングス汗西征年代弁疑」(小林高四郎)。

第七卷―「論考」「南京回教徒に関する覚書」(湯淺鑽二)、「南京の回教徒」(研究部)、「東干に対する若干の考察」(石田英一郎)、「滿疆に於いて採録せる二三の回教説話」(野村正良)。

第八卷―「論考」「回教と支那思想」(田坂興道)、「北京の回教徒商人の其の仲間的結合」(仁井田陞)。

これらの論考は(イ)外国の研究書の紹介、(ロ)伝統的東洋史学の手法による文献的実証、(ハ)関東軍占領地域のフィールドワークに分けられる。ロ・ハには「大同清真寺の『敕建清真寺碑記』につい

て」(田坂興道)、「東干に対する若干の考察」(石田英一郎)、「北京の回教徒商人の其の仲間的結合」(仁井田陞)等、支那回教に関する緻密な文献学的業績や調査研究もあるが、その他の多くの研究論文・資料紹介は西北中国の回教徒と民族問題というテーマをめぐって展開していることに気付かされる。また回教圈情報でも、盛んに西北の回教組織、回民状況が紹介されている。

試みにこのテーマに関する書評、資料、紀行、論考が各巻の地域研究にしめるパーセンテージを試算してみると、第一巻―七五%、第二巻―一〇〇%、第三巻―八〇%、第四巻―一五〇%、第五巻―一五〇%、第六巻―四〇%、第七巻―七五%、第八巻―一五〇%となり、いかに西北中国の回教徒問題に重点が置かれているか判る。

次に南洋の回教圈研究をみてみよう。表から明らかのように、南洋の回教圈に関する研究は第五巻、昭和一六年から急激に増加している。各巻の論考は以下である。

第一巻―「論考」「回教東漸史上のスマトラ島」(松田寿男)。

第二巻―「資料」「インドネシア民族の教育動向」、「一粒の胡椒」、「インドネシア人と豚肉の戒律」。

第三巻―「翻訳」「ウィルレム・ユセレンクスの眼に映じたる東印度貿易」(金沢誠)。

第四巻―「説苑」「蘭領東印度の回教徒」(宮武正道)、「翻訳」「駱駝時代と飛行機時代」(スカルノ)、「Introduction à l'étude de l'Islam Indonésien」(G. H. Bousquet, 鈴木朝英訳)。

第五巻―「論考」「蘭印回教の特殊性」(高村東介)、「回教と南洋貿易」(宮武正道)、「蘭印の華僑と回教徒」(糟谷賢三郎)、「説苑」

「回教インドネシア的な女性、S・K・トゥリムルティ」・「マレー半島の教育一般」(田辺穂積)、(翻訳)「蘭領東印度の回教―1、2、3、」(ヒュルフロニユ)、「フィリピン独立における政治的困子としてのモロ族―1、2、」(シドニー・グレーザー)、(近年における蘭印貿易事業」(ヨット・シュナイダー)、(書評)「ストゥテル Heim・高村東介訳『回教と蘭印群島』(鈴木朝英、(資料)「マレー群島における島嶼名考」・「蘭印群島地名考」(田辺穂積)。

第六巻―(論考)「概観インドネシア回教圏」(鈴木朝英、「マレーイ語よりインドネシア語へ」(新川三郎)、「キアイ・モルダトーのこと」(小野信次)、「大東亜戦争と南洋華僑の動向」(糟谷賢三郎)、「東印度の回教裁判所」(宮武正道)。

第七巻―(論考)「マライ語と回教」(宮武正道)、「マライにおける回教法の一斑」(岡林辰雄)、(翻訳)「インドネシアの回教と新しき時代」(サヌジ・パネ)。

第八巻―(論考)「マライにおける回教法の一斑―2」(岡林辰雄)、復刻版付属資料「オランダ領インド回教徒の関心」(G・H・ブースケエ)。

これらの南洋研究のテーマは支那回教の研究テーマに比べて、大分その様相を異にしており、南洋回教徒の民族論より、教育、回教法、回教裁判所、貿易、華僑といった経済・政治・行政上の実務的なテーマに偏っていることに気付かされる。そして南洋回教圏の研究が日中戦争が大東亜戦争へと拡大していった一九四一(昭和一六)年の第五巻に急激に増大していることはあきらかである。ここで我々は支那と南洋という両地域研究と「北進」「南進」という日本の

戦略との関連を注目しないわけにはいかない。次項では以上の『回教圏』の諸論考を中心に地域研究と日本軍の地域政策との関連を考えてみる。

## 五 「回教圏」と「北進」政策

支那回教の研究において何故回教徒と民族問題のテーマが論考関心の中心となっていたのかは大久保所長の「支那回民諸君に告ぐ」(第三巻)にその目的が良く現れている。これは中国語に翻訳され、一九三九(昭和一四)年六月二日、東京中央放送局において国際放送されたものである。「……現代史上、最も顕著なる出来事の一つは、まさに回教徒の覚醒と復興である。(略)諸君はたんに支那回民として孤立しているのではない。世界数億の回教徒の重要な一翼を代表しているのである。(略)過去においてかく輝かしい閱歴を持つ支那回民は今や再び蹶起せんとしつつあるのである。最近における回教徒諸団体の勃興はこれを物語っている。殊に昨年二月北京において結成された中国回教総連合会また西北回教連合会のごとくはまさに現代支那回民の自覚を象徴するものに外ならない。しかもそれは日本の正しき立場を理解せる点において、さらに防共精神を把握せる点において、且つまた東亜協同体的工作を目標とせる点において、一層その存在の理由を昂揚するであらう。……」文中にある中国回教総連合会は一九三八(昭和一三)年二月北京特務機関長茂川少佐の斡旋によって成立したもので、その目的は「日本、中国、滿州の提携を主張し、中華民國臨時政府を支持し、凶悪の共産党を打倒する」為の中国回教徒の組織化に他ならない。<sup>22)</sup> 西北回教連合会

はその支部である。また、滿州回教徒連合会は滿州治安部最高顧問部の大迫大佐、皆藤中佐等を顧問にした組織であり、その目指すところは東亜精神と防共思想との提唱・教民教育の振興・教民生活の安定・回教文化の發展などである。<sup>(23)</sup>

一九一九(大正八年)に滿州經營の植民地軍として成立した關東軍は、その当初からソビエトを仮想敵国とする基本的には北向きの軍隊であったが、滿州事變の結果として滿州国が設立されるとその北向きの性格が、ソビエト、外蒙古と國境を接することにより、いかに具体性を帯びることになった。外蒙古は既に一九二三(大正一三)年に人民共和國を設立させ、ソビエトの援助のもとに社会主義國家の建設をめざしており、滿州国と外蒙古の國境をめぐる國境紛争が頻発することになる。外蒙古と相互援助協約を結んでいるソビエトにとっても外蒙古の防衛は、シベリア防衛のために必要なことであつた。これに対して滿州事變以後の關東軍は滿州から華北へむかつて南下侵略したが、その途上内蒙古を経て西北中国に進み、さらに新疆の方面へ向かつており、一九三五(昭和一〇)年から内蒙古、華北への浸透工作を活発に行い、ここを舞台に対ソビエト防共政策を目的とした回教徒政策を展開するのである。<sup>(24)</sup> 回教圈研究所の經營母体であつた善隣協会は正にこの内蒙古工作のための機関であつた。協会は又、「蒙古研究所」を設立しており、ここには白鳥庫吉、松田寿男、江上波夫が關係していた。<sup>(25)</sup> また東京新宿に工作者養成を目指した善隣高等商業高校を經營していた。<sup>(25)</sup> 大陸の回教徒政策に呼応して国内では陸軍大将林銑十郎を会長とする大日本回教協会が前述の如く一九三八年九月に設立された。この組織を企画してい

たのは頭山滿、林銑十郎であり、創立仮事務所も黒龍会内部に置かれていた。<sup>(26)</sup> この大日本回教協会は一九三三年に成立していた、内藤智秀等の組織したイスラム文化研究所の研究組織と人を吸収したのであるが、回教圈攷究所は独立した形で善隣協会の経営下に入ったのである。<sup>(27)</sup>

ここで、攷究所が善隣協会の経営下に入った事情を善隣協会側の資料から調べてみよう。一九三八(昭和一三)年二月に善隣協会井上璞理事長等は張家口の駐蒙軍司令部の招電により急遽張家口に出張し、善隣協会の事業に対してその本部を張家口に移す等の司令を受けた。その司令は、「善隣協会は昭和九年以降内蒙古に於いて對蒙文化工作に従事したるも爾今前記事業の外、京包線沿線に於いて對回教文化事業を担当すること。對回教文化事業の遂行に就いては駐蒙軍の指示を受くる事。」というもので、その結果「善隣協会は駐蒙軍の指示に拠つて、愈々滿蒙古地区に於いて、對回教文化事業に着手する時運になつた。就いては大久保幸次教授、小林元教授等の回教問題に関する學術研究は日本に於ける權威であるに鑑み、同氏等の協力を得ることが肝要である」と信じ、小林元氏を介して大久保教授を説いて同氏主宰の回教圈攷究所を昭和十三年五月より善隣協会経営に移すことに決定」することになった。<sup>(28)</sup> 大久保が内心では「善隣協会の連中はなんにもわかっちゃいない。」と軽蔑していた一方、善隣協会側は「時勢ノ進展ニ伴ヒ回教徒工作ノ重要性ヲ痛感シ學術的見地ヨリ、基本的調査研究ヲナサシムルタメ昭和十三年五月東京ニ回教圈攷究所ヲ設置セリ而シテ其調査ノ結果八月刊回教圈ヲモッテ一般ニ普及セシメツツアリ」と事態を把握していたのである。<sup>(29)</sup>

今日の我々にはリベラルな純學術機関と関係者に記憶されている回教圏研究所と、対回教文化工作機関としてのその経営母体の性格の間の矛盾はどのように処理されたのが疑問となる。この矛盾処理の一例を我々は第五卷三号所収の「中国回教徒の牙城」(鈴木朝英訳のY・P・梅の論文)の削除問題に観察することができるかもしれない。著者所有のオリジナル版ではこの論文の二九〇三二頁が切り取られていた。この部分の改訳版は次号に掲載されているが、これからでは何故、どの箇所が問題となって切り取られたのかは判らない。しかし、「復刻版刊行の経緯」によると五卷三号のオリジナル版には二種類あった。一つは著者所有版のように頁が切り取られているものであり、もう一つは頁が切り取られておらず、末尾に〔訳者付記〕として「文中甚だしく皇軍を誹謗する言を聞くが、重慶側の西北回教徒問題に対する意見を知る一助とも思い、敢て削除を加へず、訳述した。読者諸賢の諒恕を乞う次第である。」とある版で、これには㊦が押してあったと書かれている。復刻版はこの㊦版を元本にしてあるので、切り取られた箇所を確認する事ができるのであるが、その箇所とは「中国の回教徒間に民族的な団結が存すると主張し、この団結がよく、一個の独立した政治機構の基底たり得るのだと暗示めいた提言をなすのは、日軍の代弁者側の言葉としてのみ了解し得ることなのだ。」<sup>(30)</sup>と云う数行である。削除された箇所からも我々はすでに述べた関東軍の回教徒政策の目的をはっきりと理解することができるのである。即ち防共の砦として中国回教徒の組織化を考えていた関東軍にとって、回教徒の連合を強め、中国における一個の独立した政治機構として利用する為にも中国の回教

徒を一つの民族であると規定することが必要だったのである。『回教圏』の支那回教徒をめぐる民族問題というテーマをめぐる諸論文もこの文脈との関連において理解されなければならないだろう。

『回教圏』第五卷三号は支那回教徒問題特集号となっており、先に述べたY・P・梅の論文の他、西雅雄が「最近の支那民族問題——特に『回族』・『回教徒』問題について——」を書き、国民党側の意見、中国共産党の対応について論じている。この頃の支那回教徒をめぐることは日本軍の回教圏政策の他、国民党の大漢族同化政策、中国共産党の少数民族政策の三大政策がしのぎを削っていた。これらの政策の問題点とは即ち、支那回教徒はイスラムという宗教を信じる漢民族なのか、それとも漢民族とは別個の独立した一民族なのか、ということに要約できる。西雅雄は中国共産党のスターリンの民族定義に基づいて漢回を一民族とみなすにはその言語、経済生活等の特徴をかなり誇張して考えなければならないとし、その点からみると回教徒を漢民族のイスラム教徒として漢回同化政策を経済・軍事等の行政政策を通じて強化しようとする国民党側の主張の方が正しいのではないかと思われる、と述べている。<sup>(31)</sup>こうした中国側の回教徒政策は日本軍への対応として出て来たものである。例えば中国古代史研究家の顧頡剛は、日本の領土的侵略に直面した中華民族の再興のために、イスラム教徒の担うべき役割の重要性を説き、そのためには非イスラム教徒がイスラム教・イスラム教徒をよく理解しなければならないとし、その主宰する雑誌『禹貢』(半月刊)は一九三六・三七年の二度にわたり、「回教特輯号」を出している。<sup>(32)</sup>『回教圏』では『禹貢』の論文のうち、趙振武「中国三十年來の回教文

「回教圏」を第四巻五号で、蘇盛華「回漢紛糾経歴録」を第四巻七、八、九号で翻訳し、第五巻三号では竹内好が「顧頡剛と回教徒問題」としてこの事情を紹介している。

『回教圏』所収の支那回教徒の民族問題をめぐる個々の論文、翻訳等を見てみると、いわゆる時局にあわせ、日本軍の政策に全面的に賛同する論文は少なく、回教圏研究所が決して単なる国策にそつた研究機関ではなく、純學術機関としてある程度のリベラルな雰囲気を保っていたことは理解できる。確かに戦時中に日本軍の政策に反対の立場があることを紹介するだけでも危険であつたらう。しかしその自由が、Y・P・梅論文の削除問題によく現れているようにある一定の枠内の学問の自由であつたことも我々は理解するのである。支那回教徒問題の主要テーマに關しても『回教圏』の諸論考では自分の意見は慎重に避けられている。日本の中国における回教徒政策に關しては当時の日本軍が民族をどのように理解し、規定し、利用していたのか、さらに詳しく取り上げるべき重要な問題が含まれているが、ここではこれ以上追求する余裕はない。しかし、この頃あらたに作られた西北民族学研究所を中心に、滿疆回民を宗教団体としてよりは現に發展を辿りつつある一個の民族、と捉え数多くの支那回教徒の調査研究が行われたこと、また歴史文献学的にこの問題にせまつた田坂興道も、文献上中国イスラム教徒は漢民族以外の系統に属する一個の民族であると主張していること、などは注目に値しよう。田坂が人類学・民族学の立場から明らかに妥当性を欠くものであつても、「事を實際の政治的、社会的の方面に限って申すならば、支那回教徒は全般的に一般支那人とは別個の存在として

取扱わるべきもの」であると述べているのは正しく陸軍の回教政策の目的と一致しているのである。<sup>(34)</sup>

## 六 「回教圏」と「南進」政策

日本が南進政策に踏み切つたのは一九四〇(昭和一五)年である。この年の七月に成立した第二次近衛内閣の「世界情勢ノ推移ニ伴フ時局処理要綱」(七月二七日大本營政府連絡會議決定)は以下のごとくその方針を述べている。「支那事變の処理未だ終らざる場合に於て對南方施策を重点とする態勢變換に關しては内外諸般の情勢を考慮して之を定む」(前文)<sup>(35)</sup>。要綱の要領は中国との長期戦を覚悟した上で、英米依存の態勢から脱却するため日・滿・華の他インド以東・蒙州・ニュージールランドまでを含む自給圏を確立すべきであるとするものであつた。矢野暢は「時局処理要綱」の原案が陸軍省と參謀本部の中堅將校によつて作成されたという事実から従来海軍が提唱していた「南進論」に陸軍までもが積極的になることによつて日本の国策の正当路線は、この時完全に「北進」から「南進」を指すものに転換し、この直後から「大東亜共栄圏」という言葉が公に用いられるようになった、と述べている。<sup>(36)</sup>翌一九四一年七月「情勢ノ推移ニ伴フ帝國国策要綱」(御前會議決定)では、「帝國ハ依然支那事變處理ニ邁進シ且自存自衛ノ基礎ヲ確立スルタメ南方進出ノ歩ヲ進メ、又情勢ノ推移ニ応ジ北方問題ヲ解決ス」る方針が定められ、「本号目的達成ノタメ對英戰ヲ辞セズ」<sup>(37)</sup>と決定した。ついで十一月の「帝國国策遂行要領」(御前會議決定)は「帝國ハ現下ノ危局ヲ打開シテ自存自衛ヲ完ウシ大東亜ノ新秩序ヲ建設スルヲ為此ノ際

対米英蘭戦争ヲ決意」し、「武力発動ノ時機ヲ十二月初頭ト定メ陸海軍ハ作戰準備ヲ完整」する措置が採択された。<sup>38</sup>そして同年十二月八日太平洋戦争が勃発し、戦争は支那事変から大東亜戦争へと拡大していくのである。

前に述べたごとく、『回教圈』に南洋回教圈の論考が多くなるのは、まさに陸軍が日中戦争の処理を南方の資源獲得に求めて、北進から南進へと政策転向を行う時期と一致している。またその諸論考の極めて実務的傾向の強い研究テーマは、泥沼の日中戦争から抜け出す処理としての日本軍の南方政策の目的と符合している。日本軍の南洋地域に対する目的はまず第一に資源の獲得であり、そのためにも南洋回教圈の理解が必要であったのである。『回教圈』でも時局が要請する意図を次のように述べている。「さきに支那事変を契機として、はじめて直接に回教徒と接することになったわれわれはまた南方において、さらに多くの回教徒と、ともに手をたずさえて建設に進むべき運命に到達した。七千万の教徒をふくむ南方は、本地西アジアとはまた異なった一大回教圈を構成している。…徒らに猟奇の眼をもって、南方をみることはやめなければならない。屢々新聞紙上等で、『お伽噺の国の王様』というようなことばを見受ける。スルタンはけっして、童話の国の王様ではないのである。軽々しい用語は真に慎まなければならない。」「世界を震撼せしめる皇軍の大成果は、ここに行われた蘭・英・米三〇〇年の積悪を一挙にして浄める聖火のごとく、南方回教圈を蔽いつくした。(略)土着民族に対する誤りなき認識と行き届いた理解、そこから生まれ出る愛情のみが、立派な建設を導く動力であることをわれわれは寸時も

わすれてはならない。<sup>40</sup>」この意図とは別としても、岡林辰雄の「マレーにおける回教法」、戦死した田辺穂積の「マレー半島の教育一般」、等『回教圈』の南洋回教徒研究は実際に極めてリアルであり、又その回教圈情報に見られるインドネシア回教徒の紹介なども詳細である。現代の日本の一九三〇年代東南アジア地域研究、とくにインドネシア、マレーに関しての研究は『回教圈』の研究成果・情報を無視することはできないだろう。しかし、南洋研究の意図がいかに真摯な現地の回教徒への関心に基づいていたにせよ、『回教圈』の南洋研究が支那回教徒研究と同じく、国策の枠内にあったという事は、複製版付属資料に収録されたG・H・ブースケの「オランダ領インド回教徒の関心」が恐らく皇軍を誹謗しているとの理由で削除されていることから推察できるのである。<sup>41</sup>

結局大東亜戦争は、「米英蘭の勢力を駆逐して帝国の自存自衛圈を確立し、併せて大東亜の新秩序を建設するにあり。」という目的どの範囲をもって自存自衛圈とするのか、何をもちって新秩序というのか、参謀本部自身も具体的な解答を持たず、戦争終結に関しても、南方の資源を確保して長期持久の態勢を確立し、ドイツがソ連を破り、イギリスを屈伏させてアメリカを孤立に追い込み戦争集結の機会をつかむ、といった主體的な展望を全く欠いたものであった。こうして日中戦争の泥沼から這い出すべく転進した日本軍の南方政策は、大東亜戦争の渦のなかに南洋回教徒も支那回教徒も日本人研究者も巻き込んでいったのである。

## 七 地域研究と国策

「近東諸國にたいするジャーナリズムの関心は結構なことに違くない。しかし、その関心が石油や、タンクや、伝説化された奇妙な風習のみに止まるならば、諸民族の生活を生きた姿で新しい思想の中に構想するのではなければ、それは無駄な所業である。」  
 「ジャーナリズムの関心の高まりにより」暗黒の砂漠のなかに人間の営みを発見して今さら世人は驚くのである。」これは一九七三年の石油ショック後、日本で急激に高まった中東ブームについて述べた文章ではない。一九四一年、ヨーロッパの戦局がバルカンから近東に発展した時、回教圏諸國にたいする日本のジャーナリズムの急激な関心の高まりについて述べたものである。『回教圏』の人々がフアジズムの嵐の中にあつたその当時の日本において、究めて真摯に、回教圏各地の例えは支那に、「支那人が生活していることを概念でなしに、肉体で知」<sup>(43)</sup>ろうとし、南洋への「従来の商人的態度政策というものを頗る不満表面的とし、所謂南洋資源以上に一步前進してその民族文化に迄メスを入れよう」といわば等身大の回教研究を旨指して、世界史の狭間にあつた回教圏の研究に純学問的立場から向つたのは疑いのないことである。またこの研究所に關係した人々も、いわゆる時局迎合タイプ<sup>(44)</sup>の学者とは一線を画す、その質において優秀な人々であつたことは、戦後各自の研究分野での活躍からみても明らかである。回教圏研究がこれらの人々のリベラルな研究の場、「言わば小さな梁山泊」として戦時中あり続けることができたのも、恐らく関係者の述べる通りの状況であつたろう。しかし、同時に『回教圏』の研究は結局は日本の国家政策という掌の上を抜け切つていなかつたことも明らかである。次にこの地域研究と国策

の關係を、研究所の中心的人物であつた野原四郎の経験を通じて見てみたい。

野原四郎は回教圏攷究所の時代から終始一貫、研究所の活動に關わり、アラビア語もかなり勉強していた。研究所があつた時代にあつて、リベラルな日溜まりとして存在することができたのは大久保所長の下で野原によつて断行された画期的な人事があつたと幼方直吉は指摘している。<sup>(45)</sup>野原が回教圏研究所に就職するまでの來歴をのべておこう。野原四郎は一九三〇年に東大を卒業した後、「史学会」の委員になつた。当時の「史学会」は東京帝国大学を背景にして現在以上の權威をもつていた。当時史学会の委員になるのは一種の登龍門のようなもので、それを無事に勤め終えようと、しかるべきポストにつけるのが慣例であつた。しかし、野原は二年の任期を終えてもしかるべきポストにつけなかつた。それは委員のとき彼が『史学雑誌』の書評で、東洋史の大御所的存在であつた白鳥庫吉の著作を唯物史觀の立場から批判し、新しい東洋史を追求しようとしたことが原因であつたようだ。しかも白鳥庫吉批判を東洋史学会の正統派から疎遠な位置にあつた、松井等の著書と比較して行い、松井の方を評価したのは、当時の学会の状況からみて途方もない造反と受け取られたという。<sup>(46)</sup>左翼と目された彼は、一九三三年に治安維持法違反で檢挙され、二箇月を獄中で過ごした。その後、女学校の教師を経て、一九三八年に松田寿男の紹介で回教圏攷究所の研究員となり、研究所の最後まで關係し続けた。<sup>(47)</sup>一九四四年五月の空襲で疎開させるばかりに梱包してあつた書物もろともに研究所が全焼した時、真先に駆けつけたのも野原であつた。大久保亡きあとの「回教圏ゆか

りの会」にも亡くなるまで参加しており、「大久保さんのそばに最後までいられて、僕は幸せだったと思う。」と回想している。<sup>(49)</sup>

野原は敗戦後、イスラム研究を全く断つてしまっている。かれのイスラム研究の断絶は、自分達の地域研究と国策の関係への反省そのものによっている。野原は回教圏研究所の研究時代を自己批判して、「太平洋戦争以後において軍や政府が採用した南方回教政策にたいして、私どもが反発を感じていたことは前述の通りですが、しかし、それは彼等が宗教や民族の心理をつかんでいないということからくる反発以上のものでは、けつしてありませんでした。ですから、それまでの中国民族の分裂を企てていた回教政策に対しても、透徹した批判的態度をついにとることができませんでした。したがって、極端にいえば、アメリカ、イギリス、フランスの帝国主義による民族解放運動の弾圧、そういうものに対するわれわれの反発というものも、ウルトラ・ナショナリストの反発と余り選ぶところがなかったといえましょう。」と述べ、また別の文でも、「学問とは本来直接政治に関係のないものであり、直接政治に関係あるような形で学問をやっていると、いつか、政治の下僕となり、学問自体が腐蝕し、そのせつかくの役割を見失ってしまいます。」と述べている。<sup>(50)</sup> こうした自己批判には、彼がいかに真摯に、国策を抜け切れずウルトラ・ナショナリズムといわば公分母を共有していた回教研究の責任を問い、その結果研究を断絶するに到ったのがよく現れている。しかし、彼は戦後イスラム研究を打ち切ったことについて、竹内好から「あの時、へんな形でイスラム研究をやめてしまったが、やはり続けていけばよかったですのではないか。」と問われて、「いや、そん

なことはない。」と否定したもののやはり、「あの時、ああいう形で一夜にしてイスラム研究を打ち切ったことは、何か大切なものをその時落としたという感じをまぬがれません。」と述べている。<sup>(52)</sup>

蒲生礼一、井筒俊俊彦、前嶋信次と言う例外をのぞいて、野原に限らずほとんどの人は敗戦を境にイスラム研究をやめてしまっている。こうして一九三八年に一挙に組織化された日本のイスラム研究は、一九四五年にまた一挙に消え去ってしまったのである。

## 八 終わりに

戦後、イスラム地域研究はアジアのナショナリズム運動の高揚に従って一九五〇年代末に復興し、現在に到っている。今日の我々が現在という時点から、『回教圏』の時代の研究を批判するのは簡単である。しかし、現在のイスラム地域研究は野原の自己批判をきちんと踏まえているのだろうか。回教圏研究所の幾つかの積極的評価と共にその否定面をもきちんと評価してこそ現代の地域研究があるのではないだろうか。こうした評価を通してこそ我々は、イスラム地域研究の戦後の断絶を幾許かでも繋ぐことができるのではないかと再び、失敗を繰り返さない為には、失敗に学ぶのが一番である。

今日の地域研究にも示唆を与えてくれる『回教圏』の積極的評価としては、以下のことがあげられる。(イ)『回教圏』になりよりも特徴的であるのは、現在の地域研究で中東、インド、中国、東南アジア等に分断されてしまっている各地を回教圏という広いパースペクティブで捉えている点である。これをイスラム研究が本格的な中東研究に結びついて行かないというマイナス面としてとらえる意見

もあるが、私はむしろ、地域別に分断され、異地域の研究会や学会での交流が少ない今日の学問上の欠点を克服するのに、こうしたパースペクティブはむしろ有効であると思う。現在の地域研究の最大の欠点は、各地域研究のアクターが国民国家のみになってしまい、異地域間を繋ぐ他のシステムには眼をつぶっていることにあると考えるからである。現代世界を覆っている国民国家システムが現れて、たかが二百年ぐらいなのであり、世界システムは、なにも近代世界システムに突然出現したのではなく、イスラム圏もかつて一つの「場」として幾つかの地域を結びつける有機的な世界システムであったのである。(ロ)この点からも『回教圏』の回教圏情報の項目は注目に値する。(53) それこそ中東から中国、東南アジアの回教圏の当時のニュースをカバーしている。原資料として回教圏研究所は中国語の他、トルコ語・アラビア語・マレー語等の新聞をとっていた。回教圏情報の頁の写真をみるとエジプトの新聞もとっていたようであるが、どの程度定期的に購入したのかは判らない。回教圏情報に述べられたニュースソースからみる限り、中東・インドの情報はおもに欧米の新聞・通信社ニュース及びインドネシアの新聞雑誌から引いたものが多い。いづれにしても、中国・インドネシアの回教圏の情報が一番詳しく、一九三〇年代の両地域のイスラム研究を志す人には幾つかの調査研究、文献研究は貴重な資料となる。(ハ)『回教圏』の地域研究のいま一つの特徴は、それが例えば日本軍占領下で行われたとはいえず、現地調査の体験にもとづいていることである。単に異風習の紹介、また経済的資源的興味からではなく、その地域にすむ人々を等身大に知らしめようとした意義は大きいと思う。

(ニ)欧米のイスラム研究の進んだ面とともに、いわゆるオリエンタリズムに欧米の偏見の欠陥をよく意識し、ソ連のイスラム学の紹介に力を入れていることも注目に値する。

『回教圏』の研究の否定的側面は野原四郎の自己批判にすでに充分尽くされているが、いま一度繰り返すと、(一)国策の回教徒政策に対して有効な批判が出来なかった、というよりその政策の正体がよく認識できなかったこと、(ロ)そのため、実地調査に基づく等身大の回教徒研究が、結局はアジア侵略の手段と化してしまい、ウルトラ・ナショナリストのそれと共通の枠組みの中にはめこまれてしまったこと、(ハ)換言すれば、研究を通して国策を相対化するような視野を持ち得なかった為、地域研究自体が日本のナショナリズムの中に埋没してしまったといえるかも知れない。

それでは、自分の生きている時代を相対化しながら、異文化の人々を知り、相互に理解するにはどのようにしたらよいのだろうか。例えば日本軍の回教徒政策への明確な批判はどのようにして可能であったろうか。実証レベルでは当時の日本の西北中国の回教徒研究は質の高いものであった。この研究が国策に殉じてしまい、現地の人々の侵略という形でマイナスにしか作用しなかったのは何故か。何故大方の研究者、しかも野原のような誠実で質の高い研究者にも「国策の正体がよく認識出来なかった。」のか。結局自分の置かれた時代のなかに国策を相対化することは、地域研究者が対象地域に対して誠実であるだけでは解決できないものがある。いかに研究対象に対して真摯な関心を持つとも、人は自らを取り巻く環境の制約から自由ではない、ということとは『回教圏』が示してくれた教訓

であろう。調査や実証に基づく等身大の歴史研究だけでは、研究者自身が置かれている時代を相対化することは出来ないし、国策の正体も認識しえない。恐らくミクロな事実の集積の上に、研究者の属す社会とその対象地域との「関係性」を視野に入れ得るような、マクロな視角がこれからの地域研究には必要なのではないだろうか。せっかくの等身大の地域研究を、静態的で視野の狭いものとしなないためにも、日本の歴史を対象地域との関係性において相対化する試みを逃れてはならないだろう。『回教圏』の人と時代が我々に遺した課題は重い。

\*本校の執筆に際しては、金沢誠、石井茂晴両氏にインタビュー、資料の点で御世話になりました。ここに記して感謝致します。

## 注

- (1) 月刊『回教圏』復刻版、一九八六年、ピブリオ、発行人川村光郎。第一巻二号と第八巻九号迄の通巻七十号が全十巻に収録されている。
- (2) 大久保幸次の履歴については「大久保幸次の横顔」、前掲『回教圏』復刻版付属資料、に詳しい。
- (3) 援助額について野原四郎は「一万円」と記憶しているが(『回教圏研究所の思い出』「東洋文化」第三十八号、一九六五年三月、八六頁、東京大学東洋文化研究所)、前掲「大久保幸次の横顔」では三万円あるいは五万円の諸説が紹介されている。
- (4) 「研究所叢報」『回教圏』第一巻一号、九六頁。
- (5) 「回教圏研究所略年譜」『回教圏』復刻版付属資料、二六頁。
- (6) 「研究所叢報」『回教圏』二巻五号、四二九頁。
- (7) 「回教圏研究所概要」『回教圏』復刻版付属資料、一八頁。

- (8) (9) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」八六頁。
- (10) 前掲『回教圏』復刻版付属資料、四頁。
- (11) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」八六頁。
- (12) 野原四郎、同上、九〇頁、宮崎竜夫の手紙が『きけわだつみの声』一七三〜一八頁に出ている。
- (13) 蒲生礼一、前掲「回教圏研究所の思い出」九三頁。
- (14) (15) 金沢誠氏の談話。一九八六年一〇月七日の著者のインタビューによる。
- (16) 石井茂晴氏の談話、一九八六年一〇年一四日の著者のインタビューによる。
- (17) 前掲「回教圏研究所概要」一九頁。
- (18) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」八七頁。
- (19) 宮城良造「イラン湾の重要性」一巻一号二一〜三〇頁、「パレストイナ問題の解剖」一巻三号二二九〜二三八頁。
- (20) 川崎寅雄「ハタイを歩む」二巻二・三号一七六〜一八五頁。中野英治郎「アラビア横断記」六巻一〇号八〇八〜六八八頁。中野英治郎(大阪外語教官)は一九四二年病死、六巻一〇号はその追悼号となっている。
- (21) 大久保幸次「支那回民諸君に告ぐ」『回教圏』第三巻一号、五五四頁。
- (22) 「回教圏情報—中国回教総連合会成立」『回教圏』第一巻一号、四八頁。
- (23) 「満州回教協会の成立」『回教圏』第二巻一号、九頁。
- (24) 例えば、シリントン盟副盟長徳王下の蒙古軍を作り上げ、これが中国の傅作儀軍に完敗した、一九三六年の緩遠事変などがある。
- (25) 善隣協会については、善隣協会編『善隣協会の沿革』『善隣協会史—内蒙古における文化活動—』一九八一年、日本モンゴル協会、ii—v頁に詳しい。善隣協会は大東亜省の管轄下にあり、研究所経営に伴う赤字

- 補充は、大東亜省並びに陸軍省から出ている。その事情は、三好季雄「善隣協会の終焉」同上書二二七頁に詳しい。
- (26) 「回教圏情報」「回教圏」一巻一号、四九頁。
- (27) イスラム文化協会については、川村光郎「イスラム学―戦前の流れ」、前掲「回教圏」復刻版付属資料を参照されたい。又金沢誠は回教圏研究所と大日本回教協会、大川周明の東亜経済調査会等の回教関係諸機関が、外務省回教班と共にしばしば合同で講演会や交流会を持った思い出を持っている。
- (28) 野副金次郎「善隣協会の対回教文化事業」善隣協会編前掲書、一二二頁。
- (29) 「善隣協会既設事業概要」善隣協会編前掲書、三二五頁。
- (30) ①本発見の事情に関しては、「復刻版刊行の経緯」前掲、「回教圏」復刻版付属資料、一四頁に詳しい。
- (31) 西雅雄、「最近の支那民族問題―特に『回族』・『回教徒』問題に就て―」『回教圏』第五巻三号、二〇二～二一三頁。
- (32) 片岡一忠「日本におけるイスラム研究小史」『大阪教育大学紀要、第二部門、社会科学・生活科学』第二九巻一号、一九八〇年一〇月、三二頁。
- (33) 西北民族学研究所には岩村忍、今西錦司、梅棹忠夫等が、この頃回教徒の民族調査を行っていた。
- (34) 片岡一忠、前掲論文、三六頁。
- (35) 秦郁彦「仏印進駐と軍の南進政策」『太平洋戦争への道(六巻南方進出)』日本国際政治学会編、一九六三年、朝日新聞社、一六九頁。
- (36) 矢野暢「南進」の系譜』一九七五年、中公新書、一五六頁。
- (37) 富永謙音・実松讓編「現代史資料三五太平洋戦争(二)」一九六九年、みすず書房、一二二頁。
- (38) 同上書、一二三頁。
- (39) 『回教圏』第六巻二号、編集後記。
- (40) 『回教圏』第六巻四号、編集後記。
- (41) 「オランダ領インド回教徒の関心」は前掲「回教圏」復刻版付属資料、三一七頁に収録されている。この論文がどの巻に掲載される予定だったのかはわからないが、論文末の訳者付記に「本論文が日本に対して悪意のあることは明かだ。しかし、退嬰的固定的民主主義圏の理論を結局明かに露呈している典型でもある。われわれはかような立場も認識してかからねばならない」とある。
- (42)(43) 『回教圏』第五巻六号、編集後記。
- (44) 糟谷賢三郎「蘭印の華僑と回教徒」『回教圏』第五巻八号、七三一頁。
- (45) 石井茂晴「回教圏」と蒲生さん』蒲生礼「先生の思い出」一九八四年、日本イラン協会、四頁。
- (46) 「野原四郎さんを偲ぶ会」記録』『専修大学人文科学研究月報―野原四郎教授追悼号―』第七七号、一九八一年三月、四三頁。
- (47) 旗田魏「野原さんを想う」同上月報、一〇～一四頁。
- (48) 「野原四郎略年譜」『歴史への視点』三六九～三九〇頁。
- (49) 野原四郎「在野三十年」『歴史への視点』一九八二年、研文出版、一七一頁。
- (50) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」八九頁。
- (51) 野原四郎「史料の批判的処理について」『中国革命と大日本帝国』一九七八年、研文出版、一七七～八頁。
- (52) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」九〇頁。
- (53) 板垣雄三「一九三〇年代におけるイスラム研究」『わが国における中東地域研究に関する現状と展望(報告と討論の記録)』、国立民族学博物館、一九七九年、一五頁。
- (54) 但し「回教圏情報」は、戦局の状況を反映して海外からの情報が途絶えがちになった為第五巻十一号迄で終わっている。
- (55) 野原四郎、前掲「回教圏研究所の思い出」八九頁。